

El mundo de afuera

タイトル：外の世界 El mundo de afuera

著者：ホルヘ・フランコ Jorge Franco

出版社：アルファグアラ Alfaguara

出版年：2014年

ページ数：12ページ

言語：スペイン語

読者対象：一般

ジャンル：文学

レポート作成：作成：棚瀬あずさ

概要

1971年、コロンビア・メデジンの富豪ディエゴは、自宅「城」の付近で誘拐される。犯人はディエゴの一族に莫大な身代金を要求するが、誘拐の動機はそれだけではなく、夭折したディエゴの娘イゾルデに対する犯人の偏執的な愛のためでもあった。現在と過去の間を行き来する語りによって、登場人物たちの悲しみと孤独が明かされていく。盗みや暴力がはびこり、ヒッピーたちが闊歩する混沌としたメデジンの現実と、時代錯誤な「城」をめぐる王女と妖精の幻想物語とが混じりあって展開する異色のサスペンス。

主な登場人物

ディエゴ：メデジンの富豪。モノ率いるグループに誘拐される。誘拐事件の時点で76歳。

イゾルデ：ディエゴとディタの娘。15歳で夭折。

ディタ：ディエゴのドイツ人の妻。

モノ（「猿」）：誘拐犯グループの主犯。木登りが得意なためニックネームはモノ（猿）。

ツイッギー：モノの恋人。泥棒の常習犯。ショートヘアにミニスカートがトレードマーク。

「青年」：モノと親しい青年。名前は不明。

「僕」：城の様子を木陰から毎日のように覗き見ている近所の少年。名前は不明。

セホン（「眉毛」）、トンボ（「おまわり」）、カルリートス、マレサ、カランガ：モノ率いる誘拐犯グループの仲間たち。

マルセル：ディエゴの居所を突き止めるために呼び寄せられたベルギー人の超能力者。

あらすじ

本作は全46章で構成され、誘拐事件の一部始終を核として、3つの時間軸（ディエゴとディタの結婚、イゾルデの成長と死、ディエゴの誘拐）が、章ごとに、または章の中で、入れ替わりながらそれぞれ進行する。語りスタイルは基本的に3人称だが、時折、城の近所に住む少年「僕」の語りが入る。各時間軸の概要は以下のとおり。

（1）ディエゴとディタの結婚：

第二次世界大戦後のベルリンに渡ったディエゴは、ドイツ人女性ディタと恋に落ちる。結婚を決めると、彼は城に住むという突飛な夢を叶えるべく、建築家アルクリに設計を依頼し、フランスのラ・ロシュフコー城を模した住居をメデジンに建てる。ディエゴとディタは船でコロンビアへ渡る。ディタは船旅の間に気候の変化には慣れたものの、目的地に到着すると街の様子に衝撃を受け、自分は重大な過ちを犯したのではないかという思いに駆られる。ディエゴは帰国後もディタをなかなか親族たちに合わせようとしなため、親族たちはドイツ人妻をめぐる噂話に耽る。夫婦の間には娘が誕生し、娘はワーグナーのオペラに因んでイゾルデと名づけられる。

（2）イゾルデの成長と死：

丘の上の森に囲まれた城は、メデジンの日常とはまるで別世界だ。城の中ですべての教育を受け、街の人々とは接触を持たぬまま、王女のように育てられたイゾルデは、しょっちゅう勝手に森へ遊びにいきまわり、使用人を悩ませる。夜にこっそり城を脱け出して森へ行くこともある。森から戻ったイゾルデは、しばしばおかしい髪型をしている（例えば「くるくると巻いた毛束がピエロの帽子の角のように垂れ、中央に円錐型に盛り上げた髪でぺんには一輪の花が挿してある」（第1章））。実は、彼女は森で顔に角の生えたウサギのような姿の妖精「アルミラフ」たちに会い、髪を結ってもらっているのだが、彼女のほかにそれを見た者は誰もいない。そんな城の様子を、木陰に身を隠して密かに観察しつづける人々がいた。イゾルデに恋しているモノや、「僕」をはじめとする興味本位の近所の少年たちである。

イゾルデは成長とともに流行の文化にも興味を持ち、ピアノのレッスンでビートルズを弾きたいとねだったりするようになる。運転手の車で出かけたメデジンの繁華街で、胸を刺された女性を見て気絶したりもする。ある日、ディタに連れて行かれた仕立屋で、試着室に置き忘れられた赤いミニスカートに強く惹かれ、内緒でそれを持ち帰る。後日、「僕」やモノたちが城を覗き見していると、イゾルデが赤いミニスカートを履いて現れ、「ショー」と称して「僕」たちの目の前で官能的なダンスを踊り、「僕」の眼をじっと見つめる。それは「僕」やモノにとって忘れられない出来事となった。「ショー」のことを知ったディエゴは立腹し、彼女を外国に送ろうと考える。イゾルデが外国へ出発する日、「僕」とイゾルデは森の中で偶然出会い、イゾルデは「僕」の口にキスをする。

イゾルデは病のため、異国でひとり15歳で死ぬ。ディタは悲嘆に暮れる。ある日ディタは森の入口で、イゾルデの髪のような金色の長い髪束が飛んでいるのを見かけて後を追うが、見失ってしまう。その後も、ディタが森の入口へ出かけて戻ってくると、決まって服に金色の長い髪がついているのだった。

（3）ディエゴの誘拐：

メデジンのエンシソ地区の山には、ディエゴの一族が経営する企業のネオンサインが設置されている。モノと仲間たちは若い頃、その傍らで街一帯を眼下に見渡しながら、金持ちになる夢を語り合ったが、結局その夢は叶わなかった。モノは、イゾルデへの欲望と金欲しさからイゾルデを誘拐する計画をたてていたが、イゾルデが死ぬと、今度はディエゴの誘拐を企てるようになる。

モノたちはメデジン東部の山中の小屋にディエゴを監禁し、身代金の交渉を試みる。城にはディエゴの一族が集まるが、意見の一致をみず、またディタは話し合いの蚊帳の外に置かれる。モノは不安のためか、交際しているツイ

ッギーとのセックスがうまくいかず、仲間から笑いものにされる。一方、モノはある「青年」とも親しいが（性的関係が仄めかされている）、「青年」のほうは金目当てらしい。モノは彼にねだられては高級バイクや時計などを買ってやるものの、身代金交渉は膠着しており、だんだんと絶望に陥る。

城には行方不明者を発見する名人というベルギー人超能力者マルセルと呼ばれる。モノたちは、城に送るディエゴ生存の証拠として、ディエゴの写真を撮影する。モノの仲間の一人がそのフィルムを現像させるために写真現像所に押し入るが、駆けつけた警官に撃たれて死ぬ。さらに、マルセルによってモノとその母親が住む家が突き止められたため、家は警官の一隊に荒らされ、モノの母は屈辱的な扱いを受ける。モノは逃げることを考えはじめ、自室に隠した金を取ってくるようツイッギーに依頼するが、彼女はモノの部屋で偶然「青年」に出会い、二人で金を持ち逃げすることにする。結局、ツイッギーは自宅で逃亡の準備中に逮捕され、また、誘拐犯グループの別の一人も捕まる。

万策尽きたモノは、イゾルデの墓を訪れてその傍らで眠り、翌朝「ひとつだけやるものが残っている」と小屋へ戻る。モノはまず残った仲間たちを立ち去らせ、ディエゴのことも解放しようとする。しかしディエゴはそれを拒否し、「焦らないで、やるべきことをやれ」と言ってモノとともにその場に残る（この「やるべきこと」とは、ディエゴを殺すことだと推測できるように書かれている。したがって、直接的には描かれていないものの、この直後にディエゴは殺されたと考えられる）。

すべてが終わった後、「僕」は城の様子を隠れて見ている。ディタは、マルセルから警察、使用人まで、人々全員を城から追い出す。「僕」が様子を見続けていると、ディタが森から奇妙な髪型をして出てくるのが見える。

所感・評価

2014年のアルファグアラ小説賞を受賞した本作は、1971年にメデジンで実際に起きた富豪ディエゴ・エチャバリア・ミサスの誘拐事件に着想を得た小説である。ディタ、イゾルデ、モノらも元々は実在の人物であり、また、ディエゴ一家の住居だった「城」は美術館として現存している。スペインのニュースサイト「プブリコ」(<http://www.publico.es/>)が行った著者フランコのインタビューによれば、少年時代のフランコは城の近所に住んでいて、ディエゴ一家の暮らしぶりは強い興味の対象だったという。さらにフランコは、この事件から4、5年後にメデジンで麻薬組織が横行するようになったことを考えると、事件はメデジンにおける暴力犯罪のひとつの分岐点だったと述べている。

本作の魅力は、複数の時間軸が呼応しあいながら同時に展開していく緻密な構成である。誘拐事件の顛末をめぐるサスペンスに加え、物語の進行につれて、イゾルデに対するモノの倒錯的な愛や、城の建設をめぐるいきさつなど、登場人物たちの過去が徐々に明らかになっていくさまは読み応えがある。

また、イゾルデのエピソードを通じて、森の中の幻想的な世界が物語に組み込まれているのは斬新だ。ラテンアメリカ小説における幻想性といえは、魔術的リアリズムという表現を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、本作の幻想世界は、イゾルデと彼女の死後のディタ以外の人物にとっては非現実でありつづけるので、超自然が人々の日常に溶けこんだ魔術的リアリズムとは趣が異なる。アルファグアラ賞の審査員ラウラ・レストレボが「ファンタジーと残酷さの間、そしてコーエン兄弟とグリム兄弟の間で、『外の世界』は心地よい驚きを与えてくれる」と評しているように、クライムサスペンスとメルヘンチックなおとぎ話とが、「城」を媒介に共存しているのである。ただし、この共存を新鮮と見るか突飛と見るかは、読者によって意見が分かれるところだろう。

小説の表題に象徴されるように、本作には多くの「中」と「外」が描かれる。城の中と外、ディエゴが監禁された部屋の中と外。そしてもうひとつ重要なのは、コロンビアの中と外という視点だ。「ディエゴには、ラテンアメリ

カが「ドイツ人の友人の」軽蔑の対象であることがわかっていた。彼らが友人であったとすれば、それはディエゴがヨーロッパ人のような外見と振る舞いを身につけ、音楽の好みや豊かな生活をともにしていたからである」（第25章）という記述からわかるとおり、ディエゴのヨーロッパ文化への心酔は、自国への劣等感の裏返しでもある。また、メデジンの描写の中で登場するビートルズの歌や若者のヒッピー文化、モノが青年に買ってやるブルタコのバイクやセイコーの時計なども、コロンビアが物や文化を発信する側ではなく、もっぱら受け取る側であるという事実を暗に表している。したがって本作は、自国と外国の社会・文化の狭間におけるコロンビア人の葛藤をテーマにしているとも言える。ラテンアメリカのことをよく知らない読者にとっても、本作は、馴染みのあるポップな流行文化やヨーロッパの文化の要素がふんだんに盛り込まれていることから、いくらか取っ付きやすく感じられるのではないだろうか。

本作の主要な登場人物はみなどこか満たされず、その気持ちを他者と共有することもできない孤独な人間たちであり、物語の結末も陰惨である。しかし、シンプルで時にユーモアを含んだ文体の効果もあって、作品全体のトーンはあまり重々しくなく読みやすい。暴力、愛と孤独、文化の支配関係など、本作に盛り込まれた多様なテーマは、さまざまな層の読者の心を掴むだろう。

ホルヘ・フランコは、1962年メデジン生まれ。ガルシア＝マルケスが「私のたいまつを渡したいと思うコロンビア人作家のひとり」と評した実力派。小説『ロサリオの鋏』（田村さと子訳、河出書房新社、2003）は15か国語以上に翻訳され、映画化、テレビ化された代表作。邦訳には他に『パラソ・トラベル』（田村さと子訳、河出書房新社、2012）がある。

試訳(第39章から抜粋・pp.255-258)

一週間たった。僕は金曜日の最後の飛行機で夫妻がイゾルデの遺体と一緒に戻ると聞いた。でも、もし全部嘘だったら？ 丘を毎日登ったり降りたりするたくさんの噂話みたいに、これもただの噂だったら？
そしてイゾルデは生きていたのなら？ 病気は本当かもしれないけれど、生きていたのなら？

僕は全力で丘に登る。入口の鉄柵のそばには人だかりができていて、敷地の境界のあちこちに野次馬がいる。中には車が何台か停めてあり、一族の人ふたりが車寄せのところで煙草を吸っている。ありとあらゆる話が聞こえてくる。病気じゃなくて外国の孤独があの子を殺したんだ。寄宿生活で悲しくて死んじゃったんだよ。防腐処理をして運んでくるんだって。まさにここ、城の中に埋葬するらしいよ、人形の家を霊廟にするみたい。それってどんななの、と誰かが訊ねる。博物館みたいな感じじゃないかな、と誰かが答える。防腐処理をしたあの子をピアノの前に座らせるらしいぜ、と別の誰かが言う。百以上の花輪が中にあるそうだよ。それは間違いのない。外までお墓の悲しい匂いがただよってくるもの。

「あそこだ、来た、来たぞ！」何人かが叫ぶ。

ライトを点した霊柩車が進んでくる。霊柩車は車列の先頭で、その後ろにリムジンが続く。人々は入口に群がる。庭師はしんがりの車が通るとすぐに鉄柵を閉める。僕たちはみんなミサの時みたいに口を閉ざして静かになる。車に乗ってきた人たちも、じっと黙って車を降りている。リムジンからは、黒服のドン・ディエゴと夫人が降りてくる。ふたりの顔はほとんど見えないけれど、灯りがなくても表情は想像すればわかる。葬儀屋の人たちが注意深く白い棺を取り出す。棺は午後の薄闇の中で光って見える。僕は唇が震えている。止めようと思うのに、僕の目はうるんでしまう。女たちはハンカチで涙を拭いている。ジャケットを着てネクタイを締めた4人の男が、棺を運んで石段を登っていく。僕の後ろでは、どこかで誰かが耐えきれずに泣き出す。振り返っても誰も見えない。きっと見られたくなくて、木蔭に隠れて泣いているんだろう。

もうその人は泣いていない。でも、祈っているみたいだ。

僕らには、すべてが遅れてやってくる……死までもが！

欲望が僕らを強く、烈しく追いまわしているかぎり、満ち足りることは決してない、希望を持つという蜜のような喜びにも決してありつくことはない。すべてはやってくるのかもしれない、でも気づいたのだ、すべては遅れてやってくる。モノは蠟燭の炎を見ながら朗唱した。詩人フリオ・フローレス自身が、男たちは固唾を呑み、女たち

は号泣寸前で鼻水をすすりありさまだった朗読会でやっていたのと同じように。

「ドン・ディエゴ、私は娘さんのもとに遅れて着いたんですよ。亡くなったことはちょうどあの日に知りました。赤いスカートをくすねて以来、私は城の辺りには行かなかったのに、なぜだかあの日はたまたま通りかかって人ごみに出くわして、それで知ったんです」

最後のほうの言葉を途切れがちに言い終えると、モノは深く息を吸いこみ、黙りこくった。ドン・ディエゴは頭板にもたれた姿勢でベッドに座っていて、呼吸すると胸がひゅうひゅう音を立てた。押し殺した声で彼は言った。

「きっと」ここで一度言葉を止め、繰り返した。「きっと、イゾルデは然るべき時に死んだんだ」

モノは視線を上げた。

「そう、私にはわかる」ドン・ディエゴは言った。「こんなことは言うべきではないかもしれない。ましてや父親がな。しかし多分、あなたの詩人とやらは間違っていて、私のイゾルデには然るべき時に死が訪れた。あの子はまだ恐怖というものを知らない歳で逝ってしまった。卑しいことも策略も、嫉みも知らなかった。どうして私がこう色々と並べ立ててるのかさえも」

「そりゃふざけた慰めですね」モノは言った。

「あなたの餌食にもならずすんだ」ドン・ディエゴは言った。

「私と一緒にいるとき、あの子は嫌な思いなんかしませんでしたよ」

ドン・ディエゴは片脇を下にして横になり、こう言った。

「あなたも人が悪いな、リアスコスさん。自分のやってることで胸糞が悪くならないかね？」

「自分の糞で気分が悪くなる奴はいませんよ」モノは言い、蠟燭を床に置いた。

「あなたといたとき、娘が一瞬でも穏やかな気持ちでいられたと、本気で思ってるのかい？」

「だったらあなたは、あの子があなたと一緒に本当に幸せだったとお考えですか？」

「もちろんだ」ドン・ディエゴは言った。

もっと何か言おうとしたが、咳の発作に見舞われて前に屈みこんだ。モノは立ち上がり、残りの水を入れたグラスを渡した。ドン・ディエゴはそれを飲み、しばらくふたりとも黙っていた。落ち着いてきたドン・ディエゴが言った。

「私は父親としてはかなり高齢だった。だからたぶん、あの子のレベルに追いつくにはエネルギーが足りなかった。それに私は、冗談を言って笑わせたり、ちやほや可愛がったりできるたちの人間ではない。そういう風に育てられてこなかったから。あの子をもっと抱き締めてやったり、キスしてやったり、大好きだって言ってやったりしたら良かったのかもしれない。だが、私が人生でやってきたことは全て、あの子に与えられる限りの幸せをやるためにしたことだ」

「誰もがそう言うんですよ」モノが遮った。「うちのおふくろなんかでもね」

「誰もがそう言うが、実際にそうする奴はめったにいない」

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/el-mundo-de-afuera>